



# 今こそ再生のとき、 日本の森林・林業

資源の供給や水源の涵養（かんよう）、土砂災害・地球温暖化防止など、私たちの生活にさまざまな恵みをもたらす森林。日本の国土の3分の2が森林であるにもかかわらず、国産材の利用が進まないことから日本の林業は衰退しています。その結果、手入れされずに放置された森林も増加しています。今回は、このような問題が起きた背景とこれに対し、国や企業が取り組んでいる日本の森林・林業の再生ストーリーについてご紹介します。

# 紙季折々

しき※ありあり

日本製紙グループ  
環境・社会コミュニケーション誌

Vol.18

## ちょっと気になる紙の話

三浦しをんさん（作家）



### PROFILE

#### みうら・しをん

1976年東京生まれ。2006年に「まほろ駅前多田便利軒」で直木賞、2012年「舟を編む」で本屋大賞を受賞。近著に「政と源」、「まほろ駅前狂騒曲」がある。2014年5月10日から「神去なあな日常」を原作とした映画「WOOD JOB! (ウッジョブ!)〜神去なあな日常〜」が公開されている。

みんなで知恵を出しあい、山村を活性化させたいですね。

辞書を編集する編集者や林業に携わる若者たちを主人公にした異色の小説が話題を呼び、幅広い読者層の支持を得ている三浦しをんさんに、紙や林業のお話を伺いました。

私は物心ついた頃から紙が大好きで、特に辞書の薄い紙が好きです。字も読めないのに、両親が使っていた辞書をめくって大人ぶっていました（笑）。なめらかでひやりとした感触といい、めくったときの音といい、とっても気持ちがいいなと思っていて、その頃からあった辞書への嗜好が、「舟を編む」という小説を書くきっかけになっています。ハترون紙とかも好きで、触ると「グシャッ」という鋭角的な音がする紙が大好きなんです。

紙はたわむし、折ることもできますよね。だから、本でも雑誌でも新聞でも、寝ころがって読むのにすごく適しているんです。タブレットだと形がたわまないの持ちにくく、私はちょっと読みづらい。紙のよさは、そういうふうに変形できるところもあるし、い

ざというときにはいろいろな使い道ができるということだと思うんです。たとえば新聞紙や雑誌は焚き付けにもなるし、寒いときは掛けるとあたたかいから、かぶって寝ることもできると思うし、お尻も拭けます。非常時にタブレットがあっても、電源が切れて充電できなければどうしようもないけれど、紙は使い道がいろいろありますよね。

『舟を編む』の前に「神去なあな日常」という林業の現場に生きる人たちの話を書いたんですけど、それは紙の原料にもなる木というものに興味を持っていたためです。祖父が林業をやっていたことも大きな理由です。私は東京育ちなんですけど、父方の祖父が三重県の山奥に住んでいて、小さい頃は、毎年夏になると遊びに行っていました。その村は美杉村（現・津市）といって、村の人はだいたい山仕事に関係する仕事に就いていたので、林業ってどういう作業をする仕事なのかと思っていました。それで、大人になってから、祖母に近所の人たちを紹介してもらい、林業の話

を聞かせてもらいました。その話などを参考に書いていたんですけど、林業に携わっている人たちから山への思いをうかがっていくうちに、山の現状と未来についてもだんだん考えるようになりました。

たとえば川や海の状態をよくするためだったり、土砂崩れを避けるためにも山の手入れがすごく大事だということがわかってきて、なるほどそうだったのかと。私の父がその村で暮らしていた頃は、風呂は薪で焚いていて、屋根も檜の皮とかで葺いていたので、間伐材の皮とかも使われていたらしいんですね。でも、今は家庭でのエネルギーとして薪を使うということがなくなったから、どうしても間伐材の使い道は少なくなりましたよね。せっかく切り出した間伐材を、資源として活用しないままなのはもったいない。商売にならないから人手が不足して、どんどん過疎化が進むわけですよね。山奥の限界集落は高齢化している日本の縮図で、都市の問題と表裏一体だと思うんです。そこで上手く産業を回して、コミュニティを活気づけていくということは、今後を考えたら大事なことでないでしょうか。日本製紙さんも国内の間伐材を使った紙を作られているとのこと。目先の利便性や大儲けだけを考えるのではなく、みんなで知恵を出しあって、いろんな方法で山村が活性化していくといいなと思いますね。



美杉村（現・津市）で林業関係者に取材をする三浦しをんさん。

### 「丸沼高原 植樹2014」を開催

日本製紙グループは、5月24日（土）に「丸沼高原植樹2014」を日光国立公園内に位置する丸沼高原（菅沼社有林内）で開催しました。今回の植樹は、2013年10月に「森林資源および水資源の保全・保護に関する中長期の協働活動協定」を締結した日本コカ・コーラ（株）との協同活動として開催し、当日は日本コカ・コーラ（株）と日本製紙グループの社員とその家族、約100人が参加、土地本来の5種の樹種を約1,000本植栽しました。当日の天候は良好で、青空の下、丸沼高原の自然を満喫しながらの植樹となりました。



TOPIC

三浦さんの小説を映画化した「WOOD JOB! (ウッジョブ!)〜神去なあな日常〜」を観に行きました。頼りなさげな青年が林業の仕事を通じてたくましく成長していく、涙あり笑いあいの「青春林業エンターテイメント」ストーリーでした。映像では随所で日本の美しい森林の様子が描かれており、日本の森林を守り、再生していくことの大切さを感じました。この映画を見て林業に関心を持つ若者が増えることを願っています（藤田啓子）。

編集後記

お問い合わせ先

日本製紙株式会社 CSR本部 CSR部 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台4-6（御茶ノ水ソラシティ） TEL:03-6665-1444  
ホームページ: <http://www.nipponpapergroup.com> お問い合わせ: <http://www.nipponpapergroup.com/inquire/>





# 日本の森林・林業の現状と課題

**1 日本の森林資源は充実しているのに、利用率は低迷し、「放置された森林」が増加しています。**

日本は国土の3分の2が森林に覆われた世界有数の森林国であり、このうち約4割を人工林が占めます。また、現在の年間の森林資源の増加量(約1億m<sup>3</sup>)は国内の年間の木材総需要量約7千万m<sup>3</sup>を大きく超えています(※)。

しかし国産材の自給率は約3割と低迷しています。主因には、大

口需要家が求める安定供給に対応できていないことなどがあります。現在の木材価格では採算が合わず、森林所有者は林業を行う意欲を失っています。その結果、手入れのされていない「放置された森林」が増加し、十分な量の国産材が安定して市場に出していません。

※出典：林野庁「平成25年度森林・林業白書」

# 日本の森林・林業の歩み

**2 日本の森林・林業の課題は、戦後から現在に至る歩みが深く関係しています。**

## 1. 戦後～1950年代 森林の荒廃と復旧

戦中の必要物資や戦後の復興資材を確保するために大規模な森林伐採が行われ、森林は著しく荒廃しました。その跡地を緑化するために1950年頃から植林が進められました(図1)。

1955年頃からは、石油・ガスへの燃料転換により薪炭(しんたん)の需要が低下する一方、高度経済成長の下で建築用材などの需要が急増しました。そのため、薪炭林などの天然林が積極的に針葉樹の人工林へと植え替えられました。

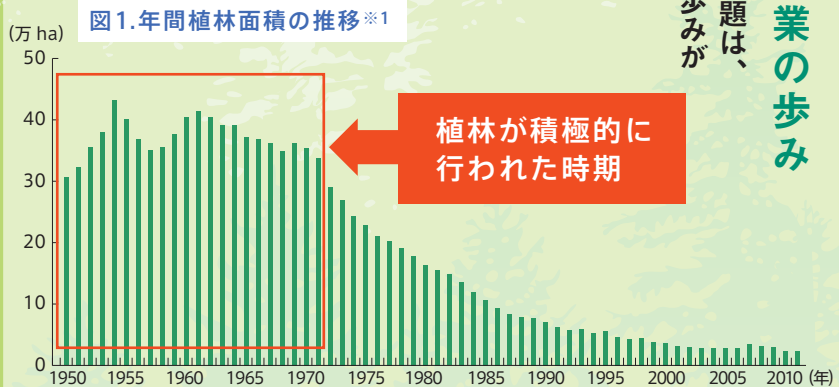


図2. 森林資源量※2と木材自給率※2の推移

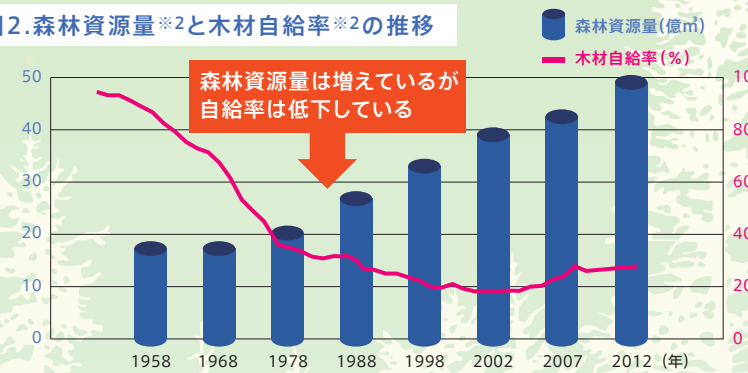


図3. 国産材の価格低迷※2と林業従事者の減少※2

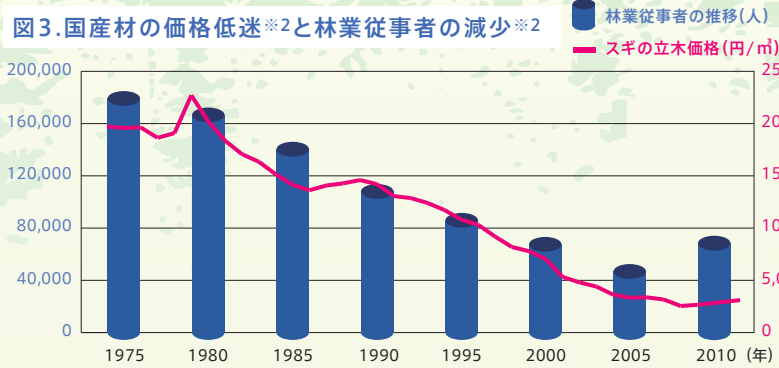
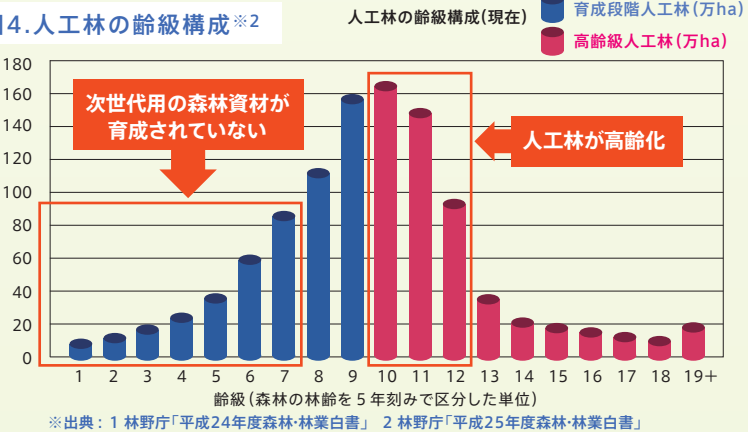


図4. 人工林の年齢構成※2

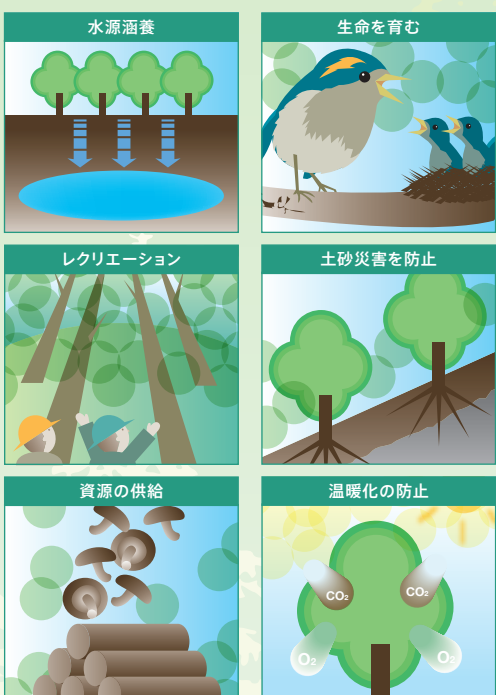


# 林業の衰退による森林の機能の低下

**3 森林の持つ多面的機能が低下し、社会問題を引き起こしています。**

森林の役割は木材などの資源の供給だけではなく、水源の涵養や土砂災害防止など生活を営む上で重要な役割も果たしています。最近では、地球温暖化の主因とされる二酸化炭素を吸収固定する働きや、多種多様な動植物の生息生育の場として生物多様性を保全する機能への期待も高まっています(図5)。

図5. 森林の持つ多面的機能



# 林業再生に向けた取り組み

**4 日本の森林・林業の再生: 活性化に向けて、さまざまな取り組みが、いま進められています。**

## ●国を挙げての取り組み

**森林・林業再生プラン**

政府は2009年に日本の森林・林業の再生の指針となる「森林・林業再生プラン」を公表しました。日本の林業を再生し、需要家が求める安定供給を実現するためには、コストダウンによる採算性の向上と林業経営を担う人材育成が必要です。現在、このプランの実現に向け、さまざまな具体的な取り組みが行われています。

## ①道の整備と作業機械の活用

森林施業を効率的に行うためには、森林内の道の確保が重要で

す。道を整備していくことで、さまざまな林業用作業機械の利用が可能となり、林業の生産性を向上させます。

## ②施業の集約化

日本の零細な森林の所有規模では、効率的な施業を行うのは困難です。このため、隣接する複数の所有者の森林を取りまとめて、森林施業を一括して実施する「施業の集約化」を進めます。

## ③人材育成

林業の生産性を向上させるために、より高度な知識・技術・技能を持った林業従事者と、その人たちの取りまとめ、取り組みを推進させていく管理責任者の育成を進めます。

## ●日本製紙グループの取り組み

**2つの価値の追求**

日本製紙は国内に総面積約9万ヘクタールの社有林を保有し、民間では全国最大規模の森林所有会社です。

社有林経営においては、1992年の国連環境開発会議(リオ・サミット)で提唱された「持続可能な森林経営」の考え方を取り入れ、基本理念に「企業経営としての会社貢献(経済的価値の追求)」と「環境保全機能の発揮を通じての社会貢献(環境・社会的価値の追求)」の2項目を定めています。

## 【経済的価値の追求】

日本製紙の社有林材は、グループ内の日本製紙材材が販売されています。日本製紙材材は、製材用の良材から日本製紙の原料となる製紙用チップ原料や木質燃料とな



シマフクロウの保護区調査



森と紙のなかよし学校(群馬県菅沼社有林)

森林認証を日本国内の全ての社有林で取得しています。

## ②環境林分の設定

国内社有林の20%を「環境林分」と定め、木材生産目的の伐採を行わず、生態系保全や水源涵養など、森林の持つ多面的機能の保全に努めています。

## ③生物多様性の保全

(公財)日本野鳥の会と協働でシマフクロウの保護活動を進めています。

## ④環境教育の実施

一般の方たちを対象に、社有林を活用した、環境教育を実施しています。

その一方で、植林による森林資源蓄積量は年々増えていきます(図2)。

## 3. 1975年頃以降 国産材の価格低迷と林業の衰退

1975年頃以降は円高も進み、木材輸入量は、ますます増えていきました。1980年頃をピークに国産材の価格は落ち続け、間伐(注)を中心とした保育作業や伐採・搬出にかかる費用も回収できず、林業は衰退し、林業従事者は減っていききました(図3)。

その結果、植林が盛んな時期に植えられた人工林が収穫期を迎えているのに、伐採されず「放置された森林」が目立つようになりました。これにより、人工林の高齢化が進み、活力のある日本の森林資源を次世代に残すことが難しくなっています(図4)。

(注)間伐:木々が密集した森林において、木を間引く(伐採すること)。